

## 終助詞の使用頻度と性差傾向 ——シナリオを資料として——

米 澤 昌 子

### 要 旨

日本語学習者の発話時において会話文の重要な要素としてあげられる終助詞の誤用がしばしば見られる。意味の誤用以外に、終助詞の使用がほとんど見られない発話例や、逆に使用過多となっている発話例など、使用頻度にも不自然さがあると思われる。また、女性学習者による「今日、一緒に行くか？」など性差別の使用を無視した終助詞の使用も見られる。そこで、本稿では、このような学習者の終助詞の誤用を招く原因を探るために、まず、主だった日本語テキストにおける終助詞の扱いについての調査を行った。さらに適切な終助詞の使用を考える上で、自然な日本語の会話文において、どのような終助詞がどのくらい使われているのかを見るため、シナリオ4作品、4038文を分析資料とし、各終助詞の使用頻度及び終助詞使用における性差傾向の数値的な把握を試みた。その結果、会話時において終助詞は約3発話に一回用いられていることが分かった。また、終助詞全てが平均的に用いられるのではなく、その使用にはかなり偏りが見られた。それは性別による使用状況でも同様であり、男性が好んで使用するもの、女性が好んで使用するものがあることが数値で確認できた。

## 1. はじめに

書き言葉と話し言葉が、その文末表現において異なる様相を示すのは周知の通りである。話し言葉では、書き言葉であまり用いられないことのない省略表現や「ノダ」文、「はい」「ああ」などの感動詞、「よ」「ね」「な」などの終助詞が多用される。これらの話し言葉の特徴づける要素の中で特に終助詞に注目して考察を進めていきたい。終助詞を扱った研究は数多く見られるが、終助詞の使用数や、終助詞別に見た話者の性差の傾向を数値で捉えた研究は少ない。そこで、本稿では、シナリオにおける会話文を資料として終助詞を調査することによって、自然な日常会話における終助詞の使用頻度及び終助詞に見られる性差の傾向を明らかにすることを目的としたい。以下の考察は終助詞の習得をめざす日本語学習者の助けにもなるのではないかと思われる。

## 2. 終助詞とは

「終助詞」という語は山田孝雄（1936）において初めて用いられた。その後、文末に付け加えられる終助詞により文の性格が決定されるのか否かなど文成立における終助詞の関与・機能、或いは間投助詞との性格上の差異などについて様々な説が論ぜられている。また、具体的にどの語をもって終助詞とみなすかについても様々な説が見られる（注1）。そのような終助詞研究の中で、現在一般的に「終助詞」といえば、やはり学校文法において終助詞とされている語であろう。そこで、以下に学校文法のもとになった橋本進吉（1969）の終助詞の規定について簡単にまとめておくことにする。

### 2.1 橋本進吉（1969）における終助詞

終助詞を「きれまとまる助詞である。この助詞で終わる文節はそこで文が終止し、完結する。」と規定した上で、終助詞として、具体的に次の語をあげている。また、意味については、「疑問・禁止（命令）・希求・説明・確かめなど。山田氏の終助詞にあたる」としている。

(一) 用言ばかりにつくもの…ぜ・ぞ・とも・て・な（禁止／終止の下に）・な

(希求／連用形の下に) ・ものか・もんか・わ・の (疑問／説明) ・こと・ろ

(二) 其他, 種々の語につくもの…か (問) ・や・よ・い・え

この種のものは (一) の下につくことがあり「い」・「え」は「か」の下にもつく。

この、橋本の文法論を基本とした学校文法では、「ぜ」「て」「もんか」「こと」「え」「い」を除き、「さ」「もの」「かしら」を加えた次の語が終助詞とされている。

な・ね・さ・よ・の・わ・や・ぞ・とも・もの・ものか・か・かしら

## 2.2 本稿における終助詞

本稿では、終助詞全体を調査対象とするため、まず、いかなる語を終助詞として扱うかを規定しておきたい。先にも述べたように、現在、一般的に終助詞と考えられている語は学校文法における終助詞であると思われるため、学校文法において終助詞とされている「な・ね・さ・よ・の・わ・や・ぞ・とも・もの・ものか・か・かしら」の13語を本稿でも終助詞として扱う。

## 2.3 日本語教育における終助詞の扱い

発話者の性差や使用場面によって使い分けが必要な終助詞は、日本語学習者にとって習得が困難であるため、誤用が多く見られる。終助詞における性差傾向を明示することは、日本語教育において有益であると思われる。そこで、終助詞使用実態の考察の前に、主な日本語テキストにおける終助詞の扱いについてここで述べておきたい。〈表1〉は、各テキストについて、「会話場面の有無」「終助詞の機能の説明」「終助詞の男女差の説明」「学習項目として終助詞があげられているか」を示したものである。表からも分かるように、終助詞を扱ったテキストは決して多くない。特に一般的な総合のテキストで扱われていることは少ない。会話のテキストや会話を重視したテキストでは扱われているものの、単なる提示や簡単な説明にとどまっていることが多く、練習問題などを擁して、学習者の適切な終助詞の習得を目指したものは、実に少ない。レベル別に見てみると、初級レベルの教科書では会話場

面が設定され、終助詞が適切に提示されているにもかかわらず、学習項目として取り上げられていることはほとんどなく、性差についての説明も見られない。使用時に学習者の誤用を招かない指導が、教師個人に委ねられているのが現状であると考えられる。中級レベルでは、他のレベルに比べ学習項目として終助詞が扱われることがやや多いようであるが、やはり、さほど重要視はされていないようである。上級レベルになるとテキストで、まず会話場面は扱われることは稀である。テキストにおける扱われ方から見ると、自然な日本語の会話には必要不可欠である終助詞が、いずれのレベルでも十分に学習する機会がないことがわかる。2級・1級文型が学習項目の中心となっていく中級後半、上級レベルにおいては、当然、話し言葉より書き言葉を教材として学習する機会が多くなる。そこで学習時に会話場면을提示することが多い初級の段階から終助詞を学習項目として取り入れていくのが望ましいと思われる。しかし、そのようなテキストがない以上、現場教師に終助詞の性格を把握した上での学習者への効果的な指導が求められることになる。

<表1>各テキストにおける終助詞の扱い

テキスト名	会話場面の有無	機能の説明	男女差の説明	学習項目
『初級にほんご』新装版 れんしゅう	○	×	×	×
『語学留学生のための日本語』I・II	○	×	×	×
『新文化初級日本語』I・II	○	×	×	×
『新装版日本語初級』I・II	○	×	×	×
『初級ひらけ日本語』上・下	○	×	×	×
『進学する人のための日本語初級』	○	×	×	○
『初級日本語 げんき』I・II	○	○	×	○
『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』VOLUME 1.2.3	○	○	×	○
『みんなの日本語』初級I・II本冊	○	△	×	×
『しんにほんごのきそ』I・II	○	(注2)	×	×
『初級日本語テキスト 日本語で話そう』	○	△	×	×
『COMMUNICATING IN JAPANESE』	○	×	○	○
『実力日本語』上・下	○	○	×	×
『総合日本語 初級から中級へ』	○	×	○	○
『日本語 2ndステップ』	×	×	×	×

『日本語中級 J 301—基礎から中級へ—』	×	×	×	×
『日本語集中トレーニング初級から中級へ』	○	×	×	×
『ビジネスのための日本語』	○	×	○	○
『日本語初中級 理解から発話へ』	○	×	×	○
『日本語会話中級』	○	×	×	×
『文化中級日本語』 I	○	×	×	×
『文化中級日本語』 II	×	×	×	×
『中級日本語』	×	×	×	×
『テーマ別中級から学ぶ日本語』	×	×	×	×
『ニューアプローチ中級日本語基礎編改訂版』	○	×	×	○
『INTERMEDIATE JAPANESE』	○	×	○	○
『現代日本語コース中級』 I・II	○	○	○	○
『総合日本語中級 (前期)』	○	○	○	○
『総合日本語中級』	○	○	○	○
『会話のほんごくドリル&タスク』	○	○	○	○
『なめらか日本語会話』	○	○	○	○
『進学する人のための日本語中級』	×	×	×	×
『中・上級日本語教科書日本への招待』	×	×	×	×
『中級から上級への日本語』	×	×	×	×
『ニューアプローチ中上級日本語完成編』	×	×	×	×
『聞いて覚える話し方日本語生中継 中～上級編』	○	○	×	○
『オフィスの日本語』	×	×	×	×
『上級日本語』	×	×	×	×
『テーマ別上級で学ぶ日本語』	×	×	△	×
『国境を越えて』	×	×	×	×
『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す 表現——モダリティ・終助詞——』	○	○	○	○

### 3. 終助詞に見られる性差傾向

#### 3.1 調査資料

終助詞の使用実態を、『シナリオ』『ドラマ』に掲載された「犬と歩けば」「天国の本屋——恋火——」「すいか」「オレンジデイズ」の4作品の会話文を資料として調査した。本稿では調査対象を現状の共通語における終助詞とするため、新しい作品であること、方言があまり用いられていないことなどの理由から、これらの作品が適当であると判断した。

### 3.2 調査方法

脚本の会話部分を全て文単位で抜き出し、個々の終助詞が用いられている使用数を調査した。〈表2〉では、2.2で規定した本稿における終助詞「な」「ね」「さ」「よ」「の」「わ」「や」「ぞ」「とも」「もの」「ものか」「か」「かしら」及び、その組み合わせ終助詞（「よね」「わね」）などの使用数、及び、終助詞を伴った文全体に占める割合を示した。百分率は、小数第2位を四捨五入し、小数第1位までを記した。また、〈表3〉では、終助詞に見られる性差を明らかにするため、個々の終助詞の使用数を男女別に示した。

### 3.3 調査結果

3.2で述べた調査方法に従い、調査を行い、シナリオ4作品から全4038文を採取した。そのうち終助詞の使用が見られた文は1381文で、全体の約32.4%を占めるという興味深い結果を得た。以下にそれらについて、考察を述べたいと思う。

〈表2〉は、本調査で見られた終助詞とその使用数、及び、終助詞全体の中に占める個々の割合を示したものである。

〈表3〉は話者の性別に見た個々の終助詞の使用数を示したものである。〈表3〉を見ると、男性の終助詞使用には偏りが見られることが分かる。男性の全使用例659例のうち、約3割の216例が「よ」である。以下、「か」「な」「ね」と続く。この中でも「な」は女性による使用が少なく、「な」を用いると男性的な表現になることが分かる。

- ・ どうしたんだよ。「犬と歩けば」
- ・ 気が早いな。「天国の本屋」
- ・ 相変わらず元気だね。「オレンジデイズ」

女性の終助詞には、男性のような偏りは見られない。「よ」「の」「ね」「か」で全使用例722例の73.3%を占める。女性の「ね」「の」の使用例が男性の約2倍であることから、「ね」「の」を用いると女性的な表現になることが分かる。

- ・ こっちに来ちゃったからよ。「天国の本屋」

- ・ 今さら何しに来たの。「犬と歩けば」
- ・ おいしそうね。「天国の本屋」

益岡・田窪（1992）には、終助詞「よ」「か」「ぞ」「のか」を用いると男性的な表現になり、終助詞「の」「わ」「わよ」を用いると女性的な表現になると述べられている。本調査では、それを数値的に示すことができたと思われる。ただし、「か」については、益岡・田窪（1992）と若干異なる結果が得られた。女性にも「か」の使用が多く見られる。これは、「か」の上に来る表現が深く関わっている。

- ・ 気分でも悪いか。「すいか」（発話者が男性）
- ・ ピアノを弾いてもらえませんか。「天国の本屋」（発話者が女性）

このように、同じ終助詞「か」でも、男性の「か」は、普通形+「か」であることが多い。それに対して女性の「か」は丁寧形+「か」であることが多く、男女では様相が異なる。

#### 4. ま と め

以上、本稿では、本稿における終助詞を規定した上で、シナリオにおける会話文を調査資料とし、終助詞及び組み合わせ終助詞の使用数とそれらに見られる性差傾向を数値で示した。

まず、全会話文4038文のうち、1038文に終助詞の使用が認められ、会話文における終助詞の使用頻度は全体の約3割（32.4%）を占めることが分かった。計算上では、約3発話に一回終助詞が用いられていることになり、会話文成立において終助詞が重要な役割を担っていることが数字の上からも確認できたと思われる。日本語学習者にとってこの数値は終助詞の適切な使用頻度の目安となるのではないだろうか。次に、終助詞の中でも多用される終助詞と、さほど使用されない終助詞を数値で示すことができた。使用頻度の高い上位の「よ」「ね」「の」「か」「な」で1057/1381文と（<表2>参照）、終助詞を用いた文全体の約76.5%を占める。日本語学習者への効率的な終助詞の学習として、先の5つの終助詞を重点的に教えるということも考えられるのではないだろうか。さらに個々の終助詞について見てみると、性差によって使用が大きく異なるものとほとんど変わらないものがあることも分かっ

〈表2〉終助詞別の使用数

な	90	6.5%
なよ	8	0.6%
ね	174	12.6%
さ	47	3.4%
よ	368	26.6%
よな	10	0.7%
よね	44	3.2%
の	211	15.3%
のか	12	0.9%
のかな	5	0.4%
のかよ	6	0.4%
のさ	1	0.1%
のね	5	0.4%
のよ	45	3.3%
のよね	2	0.1%
わ	22	1.6%
わね	6	0.4%
わよ	17	1.2%
わよね	1	0.1%
や	2	0.1%
ぞ	15	1.1%
もの/もん	11	0.8%
ものな	1	0.1%
ものね	5	0.4%
か	214	15.5%
かな	35	2.5%
かね	6	0.4%
かよ	14	1.0%
かしら	3	0.2%
かしらね	1	0.1%
合計	1381	100.0%

〈表3〉話者の性差別に見た終助詞の使用数

	男	女	合計
な	79	11	90
なよ	8	0	8
ね	59	115	174
さ	35	12	47
よ	216	152	368
よな	8	2	10
よね	14	30	44
の	60	151	211
のか	10	2	12
のかな	3	2	5
のかよ	6	0	6
のさ	1	0	1
のね	0	5	5
のよ	2	43	45
のよね	0	2	2
わ	4	18	22
わね	0	6	6
わよ	0	17	17
わよね	0	1	1
や	1	1	2
ぞ	10	5	15
もの/もん	3	8	11
ものな	1	0	1
ものね	0	5	5
か	103	111	214
かな	20	15	35
かね	4	2	6
かよ	12	2	14
かしら	0	3	3
かしらね	0	1	1
合計	659	722	1381



た（＜表3＞参照）。しかし、「か」の例からも分かるように、終助詞に見られる性差傾向を考察するには、本稿で行った男女別に見た終助詞の使用数の調査に加え、終助詞がどのような語に接続するかという調査が必要である。今後の課題としたい。本稿では、日本語学習用テキストにおける終助詞の扱われ方も概観した。終助詞、性差について詳しく説明されたものはほとんどないため、日本語学習における終助詞の扱いについては、現場の教師の裁量に任されているのが現状であろう。本稿がその一端も担うことができればと思う。

## 注

- (1) 山田孝雄（1936）では、「な・か・え・さ・い・ろ・とも・ぜ・さ」が、時枝（1950）では「し・かしら・よ・な（なあ）・ね（ねえ）・さ・な・ろ（よ）・ぞ・わ・ものか・とも・の・や・こと」、国立国語学研究所（1951）では「ね（え）・な（あ）・よ・ね・や・え・い・さ・ぞ・ぜ・わ・か・とも・かしら（ん）・こと・の・のよ・のに・に・（っ）て・（っ）てば・（っ）たら・（っ）てよ・もの・ものか・ろ・な（勧誘）・な（禁止）・け・けれども・けど・やら・だ（ね）・です（ね）・が」を終助詞としている。
- (2) △はテキストには見られないが、副教材（文法解説書・ワークブック）などには、説明が見られるということを表している。

## 参考文献

- 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館  
時枝誠記（1950初版 1978改版）『日本文法 口語篇』岩波書店  
国立国語研究所編（1951）『現代語の助詞・助動詞』国立国語研究所報告3  
芳賀綏（1954）「陳述とは何もの？」『国語国文』23巻4号  
佐治圭三（1957）「終助詞の機能」『国語国文』26巻7号  
渡辺実（1968）「終助詞の文法論的位置——叙述と陳述再説——」『国語学』72号  
橋本進吉（1969）『助詞・助動詞の研究』岩波書店  
佐藤喜代治編（1977）『国語学研究辞典』明治書院

- 西田直敏 (1977) 「助詞 (1)」『岩波講座 日本語』 7  
 小松寿雄 (1988) 「東京語における男女差の形成——終助詞を中心として——」『国語と国文学』 65巻11号  
 益岡隆志 田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』 改訂版 くろしお出版

## テキスト

- 『初級にほんご』 新装版 (1994) 東京外国語大学 留学生日本語教育センター 凡人社  
 『初級にほんご』 れんしゅう (1994) 東京外国語大学 留学生日本語教育センター 凡人社  
 『語学留学生のための日本語』 I・II (2002) 岡本輝彦他 凡人社  
 『新文化初級日本語』 I・II (2000) 文化外国語専門学校編 凡人社  
 『新装版日本語初級』 I・II (2002) 東海大学留学生教育センター編 東海大学出版会  
 『初級ひらけ日本語』 上・下 (2001) 拓殖大学留学生別科・日本語研修センター 凡人社  
 『進学する人のための日本語初級』 (1994) 国際学友会日本語学校 国際学友会  
 『進学する人のための日本語初級』 教師用指導書 (1997) 国際学友会日本語学校国際学友会  
 『初級日本語 げんき』 I・II (1999) 板野永理他 The Japan Times  
 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』 VOLUME 1.2.3 (1991)(1992)(1992) 筑波ランゲージグループ 凡人社  
 『みんなの日本語』 初級 I・II 本冊 (1998) 石沢弘子監修 スリーエーネットワーク  
 『みんなの日本語』 初級 I 翻訳・文法解説韓国語版 (1998) 石沢弘子監修 スリーエーネットワーク  
 『しんにほんごのきそ』 I・II 本冊漢字かなまじり版 (1990) (1993) 海外技術者研修協会 スリーエーネットワーク  
 『しんにほんごのきそ』 I 文法解説書 韓国語版 (1992) 海外技術者研修協会 スリーエーネットワーク  
 『初級日本語テキスト 日本語で話そう』 1.2. (1991) 3.4 (1992) 高柳和子・広瀬万里子 英語教育協議会  
 『COMMUNICATING IN JAPANESE』 (1992) 能登博義 創拓社  
 『実力日本語』 上・下 (1999) (2000) 東京外国語大学留学生日本語教育センター

凡人社

- 『総合日本語 初級から中級へ』(1990) 水谷信子 凡人社
- 『日本語 2ndステップ』(1993) 石川恵子他 白帝社
- 『日本語中級 J 301——基礎から中級へ——』韓国語版 (1997) 土岐哲他 スリーエーネットワーク
- 『日本語集中トレーニング 初級から中級へ』(2004) 星野恵子・遠藤藍子 アルク
- 『ビジネスのための日本語』(1998) 米田隆介他 スリーエーネットワーク
- 『日本語初中級 理解から発話へ』(1995) 名古屋YWCA スリーエーネットワーク
- 『日本語会話中級』(1993) 高柳和子他 凡人社
- 『文化中級日本語』I (1994) 文化外国語専門学校編 凡人社
- 『文化中級日本語』II (1997) 文化外国語専門学校編 凡人社
- 『中級日本語』(1994) 東京外国語大学 留学生日本語教育センター 凡人社
- 『テーマ別中級から学ぶ日本語』(1991) 荒井礼子他 研究社
- 『ニューアプローチ中級日本語基礎編改訂版』(2003) 小柳昇 日本語研究社
- 『INTERMEDIATE JAPANESE』(1994) 三浦昭・マグロイン花岡直美 The Japan Times
- 『現代日本語コース中級』I・II (1988) (1990) 名古屋大学日本語教育研究グループ 名古屋大学出版会
- 『総合日本語中級 (前期)』(1989) 水谷信子 凡人社
- 『総合日本語中級』(1987) 水谷信子 凡人社
- 『会話のほんごくドリル&タスク』(1997) 佐々木瑞枝・門倉正美 The Japan Times
- 『なめらか日本語会話』(1997) 富阪容子 アルク
- 『進学する人のための日本語中級』(2000) 国際学友会日本語学校 国際学友会
- 『中・上級日本語教科書日本への招待』(2001) 東京大学AIKOM日本語プログラム 東京大学出版会
- 『中級から上級への日本語』(1998) 鎌田修 The Japan Times
- 『ニューアプローチ中上級日本語完成編』(2002) 小柳昇 日本語研究社
- 『聞いて覚える話し方日本語生中継中～上級編』(2004) 梶本総子・宮谷敦美 くろしお出版
- 『オフィスの日本語』(1991) 高見澤孟 アルク
- 『上級日本語』(1998) 東京外国語大学 留学生日本語教育センター 凡人社
- 『テーマ別上級で学ぶ日本語』(1994) 松田浩志他 研究社
- 『国境を越えて』本文編 (2001) 山本富美子 新曜社
- 『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現——モダリティ・終助詞——』(2003) 三枝令子・中西久美子 スリーエーネットワーク

## 調査資料

『ドラマ』「オレンジデイズ」2004.5月号 映人社

『ドラマ』「すいか」2004.7月号 映人社

『シナリオ』「犬と歩けば」2004.5月号 シナリオ作家協会

『シナリオ』「天国の本屋——恋火——」2004.7月号 シナリオ作家協会

(付記) 本稿は2005年2月19日韓国の釜山の新羅大学で行われた第42回韓国日本語教育学会主催 学術発表大会で当時同志社大学留学生別科の嘱託講師であった入江さやか氏と共同発表をしたものをまとめたものである。本稿執筆にあたり、入江氏の多大な協力を得ております。